

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

才気という物差しでバレエを計るとしたら、おそらくローラン・プティの右に出る者はないだろう。彼が今世紀の最大の傑作の一つである『若者と死』を発表したのは一九四六年、まだ二十歳そこそこの若さだった。以来いまに至るまで、人間存在に対する鋭い省察をいかにも軽妙なフランス的感性で包んだ舞台、それがプティ・バレエの本質である。

『若者と死』も有名な詩人ジャン・コクトーの台本によるものだが、その後もプティはメリメの『カルメン』、ユーゴーの『ノートル・ダム・ド・パリ』など、フランスの文学作品を独自の手法でバレエ化してきた。『ブルースト』 失われた時を求めてⅡ』はそうした系列の作品の頂点に位置するものである。密度の高い内容の長編小説を元にはいるが、バレエのほうは、その文学性をふまえた上で、プティならではの感性にあふれた独創的な世界を展開している。

私がプティに会って話を聞いたのは一九九二年一二月に行われたバレエ『ブルースト』 失われた時を求めてⅡ』の日本公

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

演の翌日のことだった。すでに七十歳に近かったが、威圧的なほどにシャープな風貌は、若きダンサーだった頃を彷彿とさせた。『失われた時を求めて』について語り始めたら止まるどころを知らないといったエネルギーな表情で、終始熱っぽく話してくれた。

(佐々木涼子)

——私はフランス文学の研究者として長いことブルーストの作品に親しんできたものですから、そういう意味でも今回の上演を楽しみにしてきましたのですが、昨晚はじめてバレエの全編を見て、プティさんはブルーストの小説を非常に深く理解しているっしやるという印象を受けました。文学作品としてはブルーストをどういうふうに読まれましたか。

プティ はじめて読んだのはほんとうに若い時分ですが、若すぎて、よくわからなかった。ブルーストというのは、若い時には理解しにくい作品だと思いますね。人生経験を重ねた後に過去を思い出すというものですから。それで、ちょうど四十歳の時ですが、ハンブルグに行くことになって、もう一度読んでみようと思って持っていたのです。フランス版だとブルーストは全部で十七冊なんですけど、それをみんな持っていった。そし

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

て読み始めたなら夢中になって、一息で読んでしまいました。

——一息ですか。ハンプブルグには何でいらしたのですか。

プティ ああ、それはハンプブルグのオペラ座で私のバレエを上演するためだったのですが、仕事のあと部屋に戻って、朝の五時六時まで読んで、もう寝る暇もありませんでしたね。で、読み終わった時に私は、プルーストというのは今世紀のフランス文学の二人の天才の一人だと思いました。もう一人はセリーヌ。ま、プルーストはとてもデリケートだし、セリーヌは何といつか、もっと荒々しくてぜんぜん違う質のものではありませんけれど。

その時に、プルーストをバレエにしようと思ったのです。それで最初は、友人のフランソワーズ・サガンに台本を書いてくれるよう頼みました。

——あれ、あの台本はサガンでしたっけ。

プティ いえ。はじめはサガンに頼んだのですが、でもサガンがくれた台本は、映画のシナリオとしては良かったかもしれないけれど、バレエには向いてなかった。で、それはやめにして自分で書くことにしたのです。そして改めてもう一度、十七巻をぜんぶ読み直しました。

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

—— まあ、それはまた大変な仕事でしたね。

プティ　そしてその後で、バレエにするために、興味ある箇所を選んで読んだ。それが三回目です。でも三回目は全巻通して読んだわけではありませんよ。自分の台本のために選んだ部分だけを、じっくりと。

　　そういうふうにして、自分で台本を書いたわけですが、さて今度はしなければならぬことがいっぱいでした。まず音楽を決めなければならぬ。ブルーストの作品もそうですが、バレエもはじめはゆっくりと、だんだんに速度を増していく…、まあ、人生というのはそういうものですがね。

—— おや、そうですか。

プティ　そうですね。若い時には時間はゆるやかに流れるけれども、年を取るにつれて、ものごとはどんどん早くなる。で、音楽を選ぶために、ブルーストの伝記を読みました。ペインターが書いたものです。

—— ええ、私も読みました。

プティ　あのなかに、ブルーストがどういう音楽が好きだったか書いてあるでしょう。それを参考にして音楽を選びました。

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

——ほんとうに良いアイデアでしたね、ブルーストが好きだった音楽を選ぶというのは。あのバレエの音楽の選択はとても良いと思いました。

プティ だって、音楽を選んだのはブルーストですからね。

——音楽の断章のつなぎ具合も良かった。

プティ 残念だったのは生のオーケストラじゃなかったことです。

——これまではいつもオーケストラで上演なされたのですか？

プティ ええ、パリ・オペラ座でもマルセイユでも、生のオーケストラでした。そうするとともに良くなる。でもオーケストラを連れてくるとなると大変なんですよ、音楽が多くのソリストを必要としているので。それに東京では『ブルースト』ともう一つ、たった二回しか公演がありませんからね。

——残念だったのは『ブルースト』の上演が一回限りだったことです。チケットも良く売れたようですのに、どうしてでしょう。

プティ さあ、招聘元がそういうふうに決めたので、私は良く

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

わかりませんけれど…、でもこの次『ブルースト』を日本に持ってくるときには、もっと長くやりたいと思っています。少なくとも十回は。でも今回はいろんな都市を回るツアーの途中で東京に寄ったわけですから。さて、今度来る時は何が良いでしょうか。やっぱり『ブルースト』ですか？

—— ええ、是非。

プティ そう。ではまた改めて『ブルースト』を持ってくるところにしましょう。ちょうどニューヨークの時もそうでした。最初、三回の予定で『ブルースト』を持って行ったのですが、成功するはずがないと言われていたのです。商業的でないということ。ところがチケットは完売で、劇場の前に長い列ができました。で、次の年にはメトロポリタン歌劇場で十回公演。ぜんぶ満員でした。日本でもそうなるでしょう。

—— 日本でも評判はきつと良いと思いますよ。ロビーで耳にした感想は上々でした。

プティ ああ、それはとてもうれしいな。『ブルースト』は何と言っても私が自分の作品のなかで一番好きなバレエですから。

—— 昨日は観客の中に私の友人のブルースト研究者もいましたが、皆とても感動していました。幕開けで「ヴェルデュラン家

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

のサロンが目の前に現れた！」と言って。昨日の公演で印象的だったのは、観客がいつものバレエ公演と違っていたことです。ふだん、あまりバレエには関心がないような…。

プティ つまり、いわゆるインテリ層が多かったということですね。それはこのバレエがとても文化的な作品だからではないでしょうか。私がこのバレエが好きなのは、これを持ってある都市に行きますね、するとそれが、ある意味でフランス文化そのものの紹介になるといふところなんです。たとえばモネの絵とか、その他フランスを代表する芸術作品と同じようにね。ちょうど日本人が歌舞伎を持って世界を回るようなものですよ。

—— たしかにプティさんのバレエからは純粋にフランス的な感じを受けるのですが、外国の文化には興味はお持ちですか。たとえば日本の文化などには。

プティ おおいに関心があります。もちろん日本に限ってということではなく、たとえばイギリス文化でもギリシャ文化でも、私はすべての文化的なものに興味を感じますし、世界中のあらゆる国の文化を少しずつは知っていると思いますよ。そういえば、つい三週間ほど前のことですが、テレビで非常に興味深い日本映画を見ました。『砂の女』というのですが、あれは素晴らしいかったです。ご覧になりましたか。

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

—— はい。今から三、四十年ぐらい前の作品ですね。安部公房という現代作家の小説の映画化です。監督は勅使河原宏。

プティ ああ、そうだったかもしれない。あれは、私がこれまで見たなかで最も官能的なものでした。あのなかに、女の体を洗うところが出てくるでしょう。水が無いので、砂を使って、こんなふうには……。あれは日本的な官能性の実に見事な表現ですね。あれを見るだけで、日本文化について何かしら知ることができる。それから、ついこのあいだ読んだ推理小説も良かった。たぶんかなり古い作品だと思うのだけど。題名も作家の名前も覚えていませんが、ストーリーはこうです。彫刻の展覧会で女の裸体に見入っている男が、やがて女を自宅に監禁するんです。ものすごく怖いんだけど、何というか非常に深いものがあるって、フランスにはあれに匹敵するものは見当たらない。サドはあるけどね。

—— 私はサドはとても好きです。あれに匹敵するものは日本には無い。

プティ 私も好きですよ。古いけどね。

—— でも、自国の文化というのはあまり感動しないということがありますね。感覚的に慣れてるから、外国の文化に対して感じるような新鮮な感動が生まれません。

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

プティ それは確かにありますね。『ブルースト』も、一九七四年にフランスで初演した時の批評はとても悪かった。

——それは聞いたことがあります。

プティ 何だ、このバレエは、っていう感じで、ひどいものでした。私はとても悲しかった。だって、この作品のためにはずいぶん頑張ったんですから。ほんとうに残念でしたけど、でも仕方がないから全部引き上げました。もう上演しないでした。そのうちに、私のカンパニーのダンサーたちが、そのなかの一部分を、たとえばドイツで男性のパ・ド・ドゥだけ踊ったり、日本でも世界バレエ・フェスティバルでカルフリーニが「眠る彼女を見つめる」の部分を踊るといことがあって、それで外国のあちこちで、どうして全幕を上演しないんだというふうになってきたんです。それで、全幕を上演しにニューヨークに行きました。さっき話しましたよね、それが大成功だった。今ではフランスでも『ブルースト』は私の一番良いバレエだということになっていきますよ。まあ、時間がかかりましたけれどね。ですから私はどうしてももう一度『ブルースト』を持って日本に戻って来なくてはと思っています。日本の人はとても細心で、完成された仕事の質を評価するでしょう？

——ええ、まあ、そうでしょうかねえ。

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

プティ このバレエは裏に膨大な仕事量があるのです。振付とは別の、言ってみれば知的な作業が。カナダで公演した時のことですが、直後に新聞の第一面に大きな記事が出て、見出しに「フランス文化の到来」というようなことが書いてあった。私はとても満足でした。というのも、このバレエはそういう性質のものだからです。



瀬戸秀美さんが撮って下さった

ローラン・プティが語る 『失われた時を求めて』

この時ははとても話が盛り上がって、創作秘話をさまざま語ってくれた。たとえばバレエのなかでシルエットで映し出される、メトロの闇で男女が愛し合う場面（素晴らしく美しい！）は、プティ自身が大战の空襲下、じっさいに目にした情景だとか…。

残念ながら、下記に記したように、それらを書いた全文はなくしてしまって、省略したものしか手元がない。

初出は日本公演直後の「バレエの本」（音楽之友社）で、これは後に省略した形で「青春と読書」（だったと思う）に掲載した時の原稿。

ホームページ掲載〓二〇二三年六月二三日